『みいけ』が1,200号

たたかい支えて37年目
―みなさんの思い出を紙面に―

機関紙『みいけ』が今号で千二百号を迎えました。

『みいけ』の前身である『組合だより』が発刊されたのは、昭和二十一年二月の組合結成から十カ月おくれた十二月でした。当初はガリ版刷りでしたが、週刊でタブロイド二頁で三人に一部の割合で配布されていました。七十五号から『みいけ』となり、印刷も自家印刷で内容も一新され、その後大版からタブロイドへと移り現在に至っています。

現在月二回刊ですから百号出すのに四年以上の年月が必要です。ちなみに、千百号（写真左）では春闘や地方選が、千号（写真中）では三池大災害十一周年が、九百号（写真右）では九・二八災害の告訴の記事が見られます。

さらに皆さんの投稿や、ご意見をもとに『みいけ』を充実し、活動の武器にしましょう。

おくだデーに参加して

一組合員

三月十三日、大地評傘下で一斉に行なわれた『おくだ』県知事必勝のためのビラ入れに参加した。

午前十時、三池の安勝寺に集まった組合員は約八十人位。地域単位の行動であるため、いろいろの人達がおり、市職労の人も多く顔見知りの教師もいた。

今回の県知事選にはかってない盛り上がりが見え、亀井県政の「悪」を断つために、各人のなみなみならぬ意気込みが、集会の中から伝わってくるようであった。

福岡県内の状況が六～七割は『おくだ』有利のうちにすすんでいるが、大牟田関係がまだ不十分だとの情勢報告は、一人ひとりにいっそうの奮起をうながすものだった。

十時半頃から各単組別に指定の区域へ出発。私たち三池労組八人は桜台、竹の原団地である。各人五十枚のビラを持ち、四組に分かれて一軒、一軒配布にかかる。

新興住宅地の名の通り、立派な屋敷ばかりである。心よくビラを受け取ってくれるだろうかという危惧はあったが、思い切って玄関のベルを押した。

『おくだ八二』の名前は意外と知られているらしく、『県民の会』と名のって入っていく家々で、気持ちよく受け取ってもらい、ねぎらいのことばをかけてくれる人も多かった。

私の場合、総じて九割五分ぐらいの在宅で、残りは不在。一時間余りで無事配布を終える。

今度のビラ配布で感じたのは、こちらも亀井の腐敗を述べながらの手渡しであったが、百パーセントの手応えとまではいかなくとも亀井の不正はそれなりに理解されているようであり、「やるべきだ」と口にする人もいたし、『おくだ県知事』実現へ向けての感触が感じられ、私自身、心強い思いでビラ入れを終えることができた。

× × ×

十二分会職場新聞「あおぞら」第百八号、三月二十五日発行から。

一口ニュース

監督官だ、岩粉だ

監督官が入坑するのは普通の場合事前に通知されている。現場では前日から準備され、岩粉が撒布される。ところが三月二十五日、三川鉱七十二卸では撒布されていなかった。監督官の入坑が抜き打ちだったのか、会社の情報入手が遅れたのか、あまりにも現場の状況が悪かったのか、当日常一番の仕繰工や機械工まで呼び出し一番方で撒布させた。現場のアラを隠すようなことはするなとの声があった。

紹介

藤本弁護士が『相続入門』を出版

三池闘争で、総評弁護団の一人として力強く支援いただき、現在も三井の責任を追及するCO損害賠償訴訟の中心的存在として、心強い法廷闘争をご指導いただいている藤本正先生が、このほど『愛する人に残すための遺産相続入門』という本を出版されました。相続問題を、人間の生き方として基本にすえ、法律・税務の両面にわたり、わかり易く書かれています。

遺産とか相続とかいうと、ほど遠いもののような感が今までしていましたが、読みすすんでいくうちに、法律も法律上の制度も人生に奉仕するものに過ぎず、人生にとって暖い心こそが至上の価値だという、先生の信念を随所に読み取ることができました。

「遺言とは人生の最後にしるす短文学であり、さわやかに、あたたかい愛の心を所感の形で残すもの……。仮に相続される財産が、まったくなかったとしても『僕には君に残すべきものは何にもない。ただ限りなき君への愛の心のみを』と、ただそれだけの遺言でも、いいのでは……」（内容の一部から）

（田中精一・記）

自ら解決した厄介な相続事件を徹底分析、共同討議して読者におくる。ぜひご一読を。ダイヤモンド社刊。
定価1,300円。

女坑夫の語り聞きから　その二

キン吊り褌

十六分会（本所）　武松輝男

「坑内でオナゴがはめとる褌はですナ、黒色か紺色でしたバイ。だいたい生地はサラシでできとったデス。長さは六尺でした。背の高いオナゴは、九尺の褌バ使っとりました。

褌のはめかたは、相撲取りと同じで、腰の後で締めとったデス。

男ン褌は前で結ぶでっしょ。オナゴが、男ンごと褌バ前で締めよるなら、パッと引っぱられどんなら、パラッとはづれて、それこそアレー、チ言わないかんでっしょうが、それじゃから、後で締めよったデス」

後の結び目をはづされても、すぐにご開帳しないようにしていた。

まず、肩に褌の端を当て、太モモをくぐらせて後にひいた。そして腰に巻いた。そのあと肩に当てた褌を、さらに太モモをくぐらせた後で締めた。

太モモをくぐる部分は、二重（ふたえ）になつていた。だから後の結び目を、いたずら者にはずされても、すぐには姿を見せない。

「しかしですナ、こげな褌バしとったのは、片盤とか本線坑道とかで働いとったオナゴでした。切羽に行くと、そらあ、風がピクッともせんこつが多かったもんでですナ、水浴びしたごと汗バかきよったデス。

そういう採炭切羽では、六尺フンドシはとてもされたもんじゃなか。そげんかことばしよるもんなら、あんた、ナァ、マメンほとびるですバイ。

それで、そういう採炭切羽で働いとったオナゴは、ホラ、昔、男ン子がキン吊りというとバしとったでっしょうが、それと同じごたるものばしとったデス」

ストリップで言えば前バリである。これを普通G線という、G線というのを英和辞典でひいてみると、熱帯土人のふんどしと説述している。

坑内という、熱暑のはげしいところで仕事をする女坑夫も、英和辞典でいうG線と同じようなものを身につけていた。人間の知恵というのは、古今東西、そう違わないものだと思ったものだ。

「キン吊りのごたる褌バして、腰バ曲げてガンズメで石炭バ、ザルに入れているとですナ、後から見ると、あそこがまる見えになりますたい。

切羽は暗かでっしょうが、それでタチの悪か男がいてですナ、ツバつけて、いきなり差し込んでくるのがおっとですたい。

それでですナ、オナゴは、キン吊り褌バ、ずっと後に下げとったデス。前バ出して、後ン方バ隠しとったデス。

切羽でオナゴは素裸じゃった、と言う人がいますたい。それはたぶん、キン吊り褌バ、ずっと後にしとっとバ見て、素裸と思ったとじゃないでしょうかネエ」

人目につかない地の底であるにしろ、あられもない姿で、石炭を担っていたのだ。

それが、どれほど辛いことであったか。底抜けに明るい笑顔をみせながらも、ときおり見せる、頬肉のケイレンが、それを如実に物語っていた。

（カットも筆者）

釣りキチ余談　連載第二十三回

素人写真屋の巻

石田鈍竿

昭和四十四年秋、鹿児島の秋目で今釣れよるげな、という月田釣具店の情報に胸を躍らせ、むりやり弟を誘って、ホンダ四輪三六〇CCを走らせた。

行程二百八十キロ、走れども走れども距離は縮まらず、九州は広かばいとつくづく思った。しかも深夜で、人に道を聞くわけにもいかず、頼りは地図だけ。大浦町から山越えしてやっと到着。午前三時を過ぎていた。

秋目は、薩摩半島の南端にあり、坊津・秋目・野間池の海岸線はみごとな景勝である。船頭の案内で上礁したころ、夜が明けかかる。

沖の方から、〝ザーッ〟と雨のような音が押し寄せてきた。目を移すと、大魚に追われたのか数知れない小魚の大群が、海面を飛びながら大移動をしている。

まず弟が第一投した。ウキが立つ間もなく、スーッと吸い込まれ、合わせたと思ったら、三号をプツンと切られてしまった。瞬時のことに俺はど肝を抜かれ、第二投もせずに五号に切り換えた。

〝ギューン〟　第一号、クロ一・五キロ。

景色に気をとられ、頭の方が釣り気になっていなかったせいか、あわてたのなんの、やっと取り込み、フーッと一息。

今度は沖目に飛ばしてみた。ウキがゆらゆらと揺れながら左の方へ流れていく。

突然、ウキが消えたという感じで吸い込まれ、同時に手元がグーンと重くなった。そのまま右へ左へ、沖へも走る。糸を送り竿を立てた。竿は限界と思えるくらいに大きく曲がり、道糸はキューンと鳴く。魚の走りに合わせて右、左と向きを変える。

やがて海面に現われたのは、一・五キロ以上もある鰹だった。弟も一本あげた。

悲鳴に近い弟の声に振り向くと、竿が限元から曲がり、穂先は水面に突っ込みそうになっている。

『こら大物ぞ、頑張れッ、魚ば弱らせて浮かせろ、写真ば撮ってやる』

弟は脚を踏ん張って強い引きにたえている。やっと魚が水面近くまで浮いてきた。

『よし、今だ』

構えたものの、素人写真屋のうえに瀬が狭くて、うまくレンズに入らない。弟が、『写真はよかけん、早うすくうてくれ』と悲鳴をあげる。

シャッターを押そうとしたら、魚の奴がまた引き込んでしまった。そのまま瀬際にもつていかれ〝プツン〟。

すかされた弟は〝ドスーン〟と岩に尻餅をついてしまった。『アイタタ……。写真はどげんでんよかったつに……』と怒ること怒ること。

予想外の釣果に欲を出し、上塘旅館に一泊。翌日の期待で夜も眠れなかった。

鰹の刺身に舌づつみをうったのはもちろんのことである。

釣りキチが、ハンドル握る午前二時

（風声）